広野文芸欄

広野町師走句会

季題　当季自由句

白鳥の一羽一羽の朝日かな　山田　基星

日がさして窓にはりつく秋の蝿

日なたぼこ祖母の背中の丸くなり

赤々と入日に映える柿すだれ　遠藤健太郎

御無沙汰を一筆そえて賀状書く

釣行の自慢ばなしや路地小春

谷川の光る紅葉のあはひより　酒井　津祢

杜鵑草実となりゐたり風の中

残る葉をゆがす風や秋深む

媒払い終りて友と酒を汲む　根本　山水

稲雀戻りて騒ぐ屋根の上

湯豆腐や猫舌二人見つめ合ふ

吹く風にから〳〵かわく枯小菊　阿部　真生

月明かり海にきらめく宵の風

爽秋の風にふかるゝ心かな

アパートの窓一連の柿干さる　西　山　子

遠山の湯の灯煌めく霜夜かな

深々と胸に吸いこむ朝の霧

秋深む大内宿の御本陣　宮下　純子

秋しぐれ塔のへつりの橋わたる

松茸の香りふるまふ山の宿

白鳥の群れに交りて家鴨二羽　鯨岡　一生

風が止み中にとゞまる雪蛍

かじけ猫白黒まじりて五匹おり

花たむけ供養の日々や冬初め　塩　史子

主なき部屋の広さや日脚伸ぶ

北風や母の遺愛の風車

秋刀魚売る声よくとおる秋日和　鯨岡　正子

まゆ太く一天にらむ案山子あり

我が庭の小菊の色のとり〴〵に

広野みなづき短歌会十二月詠草

（旧仮名使用　五十音順）

六十年たちたる月日なつかしむ同級会の誘ひをうけて

友との集ひ夫は反対したれども吾は聞きながす深き喜びに　猪狩ユリ子

父は死すと思ひてゐると便りあり吾の気持をかきむしるごと

娘を想ふ親の心に変りなし幸せ祈り掌を合はせをり

便り出せど返事は遂に来ずじまい我の思ひは空まはりせり　小澤　健次

テーブルの模造の花にまぎれ来し蜂はときどき話を止める

裸木の公園歩めばうす色の寒梅の花に冬のときめき　新田　里子

教会での娘の結婚式を祝ひつつ牧師の言葉をしみじみときく

嫁ぎゆく娘の婚礼を喜びつつ手放す淋しさに涙溢るる　菅原　泰郎

くつろぎて一口二くち煙草吸う煙草はかくして覚ゆるものか

一人居の室に暖房温風器春招ぶ期待ささやくごとし

真夜覚めてワイン含めばふとおしもおもかげにたつ人を偲ぶも　田副　耕一

隣組の老爺亡くなり切実に生老病死を思ふわびしさ

暗きニュースのみの世となりしみじみと余生の寂しさ思ふこの頃　藤田　孝夫

思ひたち友らと訪ひし飛来池に白鳥羽搏き飛沫あげをり

古き餌らし撒けど水面に落ちゆかず手許足許粉にまみるる

餌撒けば優雅な白鳥水面に瞬時争ふ鋭く啼きたてて

白鳥は水よりあがり悠々と思はぬ大きさに目の前歩む　山内　洋子

老ひ深む吾が誕生日祝ふとて心ごころを賜ふありがたさ

日々のすべて我が時間なるに事ごとの片づくといふことも無く過ぐ

植ゑし記憶なきりんどうの花咲きて遠き純愛小説ふとよみ返る

更くる夜を音なくこもる家の中娘と二人なる空気乱れず

背の君の服喪の友はいかにかと心痛みて思ひを馳する

この年はわけて思ほゆ「いのち」の語形に見えず形もつ語か

花の無き遊園地の真昼折ふしに小鳥の影の砂場をよぎる　山口　歌子